

西独の青少年教育〈上〉

平等な立場を基礎に 誕生の翌日からしつけ

青少年教育にたずさわる私にとってもっとも困ることは、教科書らしいものがないということだ。といって学校のように、いちいち教科書にしたがって進めるとしたら、これまた味気ないものとなり、若者たちも動かなくなってしまうだろう。私は教科書にかわるものを求めて毎年ドイツや、ヨーロッパ各地をたずねて、青少年の活動や施設はもちろん、いろいろな指導者たちとも友になり、また、彼らのやり方について学んできた。

何度行ってもわからない。いやますますわからなくなった。ひとついえることは、青少年育成について国はもちろん、社会も家庭もすべてが協力し、総合的に取り組んでいるということだった。

はじめにドイツのごく一般的な家庭でみられる風景の二、三をあげてみよう。

ドイツでは、子供に対する家庭教育や、「しつけ」は、子どもが生まれたその翌日からさっそく始められる。そして、生後一週間くらいからは、もう自分の部屋や、ベッドが与えられ、ひとりで寝ることを教えられる。

両親は、ベタベタと必要以上に子供に愛情をふりまこうともしないし、また、必要以上にたたいたり、しかったり、ヒステリックにはならない。それでいて、この時代からしてよいことや、わるいこと、態度や、マナーをちゃんと教えている。

子供がたとえば、食事中にガサガサと動きだす。そのつぎにはテーブルの上に手がのび、ジャムのビンなどに指をつっこんだりしていたずらを始める。そこで、母親はいちおう形式的に注意を与える。ところが子供はあっという間にやめようとしなない。そこまでくると母親は、もうゴタゴタ言わず子供の部屋のほうをゆびさし、ただ一言「部屋にかえりなさい」ときびしく命令する。子供は初めてハッと気がついていたずらをやめる。しかし母親は部屋にかえる命令を取り消そうとはしない。子供は泣きじゃくりながら自分の部屋にヨチヨチとひとりでかえっていく。

こんなことを毎日の生活の中で繰り返していきながら、家庭でのルールや態度、しつけを身につけていくのである。

外国の家庭ではよく体罰を加えるときくが、少なくともドイツでは、子供をたたいたりはない。それよりも、もっと毎日の生活的なつきあかきなかねの中から子供をしつけ、教育している。それも一歳半くらいまでに。

こうして少年期、青年期への基礎と、民主主義のルールを学んでいくのである。

ある青年の家庭でのことを述べてみよう。この青年の父親は地方検事をしている。青年は十七歳、実に質素な家庭である。この青年は家族とよくディスカッションをする。彼らの議論を聞いていると、まるで友だち同士のようなようだ。しかし、こんなときでも青年は幼いときから身につけてきたルールやマナーをちゃんと守っている。

この家庭で面白い会話を耳にした。父親がむすこにいいきかせていたことばだ。「うちの中では家族に不愉快な思いをさせないような態度や、服装でいるように、家庭はみんなの共同生活の場なのだから。しかし、一歩外に出たら自分の好きな服装や、態度でふるまいなさい。社会では、自分のことは自分で責任をとりなさい。そのことに関して私たちはいっさい関知しないから」と。

世界で、最も優れた青少年活動をしている国や、青少年教育のゆき届いている国は西ドイツだといわれる。

いまや、世界中の国々が、自国の青少年教育にやっきになりながらも、ヤング・パワーにおされ気味で、なんとかしなくてはとあせっている。そんなとき、つい何か模範的なものを求めたくなるのは当然のことだろう。

しかし、われわれにかぎらず、諸外国の人たちが西ドイツを訪問して、ユーゲント・アルバイト（青少年活動）を勉強するということは非常にむずかしい。もちろん、ドイツのそれを学ぶためには、ドイツという国を知るために、ドイツの歴史、文化を知ることが大切であり、その上、ドイツ人がたぎをも理解しなくてはならない。それ以上にわれわれはまた、民主主義、個人主義ということについてもよく考えてみなければ、ドイツの青少年教育や、青少年活動、あるいは指導者たちの態度などを理解することは困難である。それはちょうどモザイクの一つ一つの小さな石のように、それぞれがみんな違った形をしており、違った方向に向いていて、それが組みあつて一つの立派な絵ができていると同じように、青少年ひとりひとりがそれぞれ違った方向に、違った活動をしていくからこそ青少年活動が大切であり、必要になるのだ。団体とか、活動の中に一本の筋をつくり、それに向かって青少年たちをまとめていくことではない。

また、連邦政府の家庭青少年省の友がこうも話してくれた。

第一に、今の時代に合った青少年活動というのは、イデオロギーとか、そういったものを中心としたものではなく、若い者自身が中心に立ったものでなくてはならない。若者たちはいろいろな要求をもっているし、問題ももっている。

ユーゲント・アルバイトは、社会から逃げ出した若者を集めたものではない。そういう青少年たちも社会の一員として認め、彼らに協力してやることが大切だ。そのまま野放しにしておくとか、保護するとかというものではない。どんな場合でも、平等な立場に立って協力しあっていくことがドイツの青少年教育の基礎におかれている。

国際青少年協会総主事 林 壽彦

西独の青少年教育 〈中〉

理想像などは不必要 ヒッピーたちも仲間に

西ドイツの各地で青少年教育の指導者たちと話しあってきたなかから、いくつかの問題をとりあげ、それに対する彼らの考え方というものをみてみよう。

◇ 今日の青少年は、一般的に自由というものを好むが、青少年活動をしたり、グループにはいったりすると、自由を束縛されるのではないかという考え方が強いが。

【答え】第一に相手を平等にあつかうこと。第二は、その人にもいろいろなことに対して責任をもたせること。また、できあがったものを前に置くのではなく、その人と一緒にそれを創造するということだ。たとえば、講演会を開いても、それを青少年に聞かせるためにするのではなく、青少年と一緒に考えるためにする。

それから、いまひとつ付け加えたいことは、今までドイツは青少年の政治教育に力をいれてきたが、それは青少年たちにりっぱな批判力を養わせることになった。学生運動などはそのよい例ではなかろうか。それに対して、おとなたちの中から間違った教育をして甘やかしてきたからだという声もでている。日本でも同じような問題が起こっているが、しかし、いまこういった答えをだすことは非常に危険なことだ。いままでの政治教育や、民主主義の教育は、一方的に教育してきただけで、青少年たちがやっとな動けるようになってきただけだ。活動的であるべきはずの青少年たちがやっとな社会を批判し、いろいろな動きをみせ始めてきた。教育はこれからではなかろうか。

青少年のそうした力を、創造的な方向に、建設的な方向に仕上げていくことがこれからの教育者の使命ではないだろうか。

過去の青少年はおとなたちの援助や、指導者たちに甘やかされ、それに慣れてしまっていて、自分たちで考えるということをしなかった。そういう面では、おとなは青少年たちを動かしやすかっただろう。

◇ ドイツにもヒッピーのような青年たちがたくさんいるが、その人たちに対してはどう思うか。

【答え】われわれの青少年活動は、ひとつの階級に対してのものではなく、すべてを含めて活動したいという願いをもっている。したがってヒッピーとか、ガムラーとも関係をもっているし、その人たちの相談にもものって、いろいろと助けることもしたい。また、暴力的行為をふるう青少年たちとも現に関係をもちつづけている。たとえば、市が 100%の予算を持って援助している若者たちのクラブ、たまり場がある。そこにはヒッピーとか、前衛派とか、そういった人たちが集まっている。

◇ 自由を尊重するということは非常に大切なことだが、それがゆきすぎだとか、わがままに発展していくとは思わないか。

【答え】自由ということばには、いろいろな解釈の仕方があると思う。ドイツではとくに一人の自由は、他の人の自由を束縛してはならないし、傷つけてはならないという常識がある。それを若い人たちに理解してもらうことも大切な教育であると思う。

◇ ドイツでは、かなり役所が青少年団体や、青少年活動に対して力を入れ、経済援助もしているが、日本式に考えると、お役所が力をいれるとご用団体になりがちで、民間団体は育ちにくいと思われるが、その点については。

【答え】それはドイツでもありがちなことだ。役所が援助すると保守的になり、新しいことを試みるのが少なくなり、実験などもしなくなるからだとおもう。しかし、われわれは違う。役所のほうからいろいろモデルとか、実験を好んで進め、また、青少年にも提供している。 ヒ

ッピーたちのクラブ・ハウスに援助しているというのも一つの実験で、いままでの指図した時代から、彼らになにかをやらせてみる。そして、そのなかから彼らが次の新しい力をうみだしてくれることと願い、信じている。

◇ 日本には青少年のために、期待される人間像というのがあるが。

【答え】われわれは、それぞれが自分の理想と目的を持って、自分で活動してくれることを願っているので、ひとつの理想像をかかげると、それに左右されることになる。だから絶対にひとつの理想像をかかげるといえることはできない。

◇ では若い人たちがどうあったらいいか。あるいはどうあるべきかという指針は必要ないか。

【答え】そういうものがあつたとしたら、偏見をもってしまうのではないだろうか。そのような偏見をもつたら、青少年活動はできなくなってしまふ。

青少年ひとりひとりが理想像をつくり、自分の可能性にあつたものをみつけだす。それを助け、あるいは、そういった方向にもっていく。それが青少年活動の一つの目的ではないだろうか。というのは、自分の行動に責任のとれる人間、自由に行動できる人、そういう一人一人の才能にあわせて、その人の成長発展に協力していくことが、青少年教育というものではないだろうか。

青少年活動の中では、指導者と青少年は、常に平等の立場に立って、一緒にひとつのものをつくりあげることが大切で、そこに方向を示す理想像などは不必要なことだ。もし、あつたとしたら、青少年活動は育たないのではないだろうか。

国際青少年協会総主事 林 壽彦

西独の青少年教育 〈下〉

海外旅行には援助も 「やがて国家の利益になる」

これまで自由とか、平等ということばをたくさん書いてきたが、戦後二十五年、日本人が口にしている自由と、だいぶ違うことがおわかりいただけたと思う。ドイツ人のいう自由とは「自分の自由を守るためには、他人の自由をも尊重する」というのが、その根底にしっかりおかれているのである。たとえば、自動車の運転マナーひとつみても「常に他人の運転を考えて」というのが常識となっている。イライラしながら運転している日本では、いくら道路がりっぱになっても、決してよくはならない。渋滞が起こるのも、みんなが自分のことしか考えないからである。

青少年の教育を考えてみても、われわれ指導者は、ひとつの目標に何とか早く青少年たちを近づけようと、無理押しをしたり、あの手、この手と、ついイライラしてしまいがちである。さらには、ドイツ人たちが遠大な将来に向かって、時間をかけてじっくりやっていくというのをみると、これまた、イライラしてしまう。

この二、三年、ドイツの各都市では町中掘りまくって地下鉄工事をやっている。一昨年掘っていたところを去年も工事していた。そして今年もやっぱり同じところが工事中になっている。いったいどこまで工事が進んでいるのかよくわからない。やじ馬根性を出して工事人夫に聞いてみた。「いつまでかかるのか」と。かえてきた答えは「さあ」のひとつ。とにかくこれでよしと、なっとくできたら次に進むんだそうだ。ちょっとオーバーなようだが、それ式で基礎からがっちり固めていく。また、これらの仕事が来年度にはいよいよ完成という時は、その市の総予算の40%でも投入するとのこと。時間をかけて基礎固めをし、仕上げには他のあらゆる仕事を止めても、その仕上げの完ぺきを期するというドイツ人の底力というか、おそろしい気さえした。

なるほどヒッピーであろうが、ガムラーであろうが、その流行的なことに目をくれず、時間をかけて彼らともつながりを持ち、戦後力を入れてきた政治教育の効果が見え始めた昨今、これからが教育だと平然と答える。

たばこを吸っている少年をみて、その指導者たちに「なぜやめさせないのだ」と聞くと「注意すれば私の前では吸わなくなるだろう。しかし、今度は私の見えない所でもっと吸うだろう。彼自身がやめようと、自分にいきかせない限りとめてもむだなことだ」と答える。ちょっと聞くとだらしのないようだが、どうしてどうして、これくらい冷淡というか、きびしい教育はないだろう。獅子の子千仞の谷もいとこだ。

青少年教育とは、おとなが踏んできた経験を、彼らに引き継ぐというのではなく、彼らは彼ら自身で経験を積む。もし間違いを起こしても、それはどういうふうに分力で解決していくか、その問題と対処するかが大切だという。そして、その結果を、自分で自分のために利用する。そういう力を養うことが大切だという。ともすれば、指導者たちは、豊富な経験をもっているのに、青少年たちのそれと比較して、自分のとおった道が正しいとか、君は間違っているとか言いがちであるが、その方が危険ではないだろうか。

こうした考えをもったドイツの青少年教育や、青少年活動と、日本の青少年教育と比較して考えることは非常に困難なことだ。

日本と、ドイツの青少年活動について述べようと書きだしたものの、だんだんむずかしくなり、比較することさえこわくなった。「人のふりみてわがふりなおせ」という古いことわざではないが、ドイツのユーゲント・アルバイトをみて、日本の青少年教育や、青少年活動のあり方や、今後を考えることはできても、よしあしをいうのはまだ早いような気がする。

青少年は流動的だとよく言われるが、これは日本だけのことではなく、世界中どこでもいえる

ことだろう。ドイツを二度や三度みたからといって、ドイツの何もわかっていない。いや、ますますわからなくなったという方がほんとうだろう。

しかし、ここまで述べてきたようなことを考えることは決してむだではない。また、五度や六度行っても損ではない。それなりに新しい経験を身につけ、それを基に、また次々と新しい考えが起こっているのだから。

それは、われわれが新しい考えを起こすと同じように、ドイツ人たちも年々、数々の経験を基に新しい考えをもっていこうから。

ドイツの青少年教育予算の中に「国際交流」という項があり、膨大な予算をつけている。青少年たちの海外旅行を援助するための予算と、海外からの青少年をドイツにおいて援助するための予算である。ドイツの青少年が海外旅行をするためには、一人一人に大きな援助を与えている。しかも、なんのヒモもつかない援助が。

なぜだと聞いたら、若者たちが国をはなれて海外旅行をすれば、いろいろ夢をもち、経験を積むだろう。それはきっといつか国家のための力になっていくと信じている。海外からの青少年がドイツにやってくれば、ドイツの青少年たちが、たくさん海外のことを吸収することができる。そのための投資なら決して高くないと。

おどろきだが、こんな考えがドイツのおとなにはあるのだ。日本の青少年教育がこのレベルに達するのに、あとどれくらいかかるだろうか。

国際青少年協会総主事 林 壽彦